

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

Una vacanza sabbatica ①9

* 海のワインがつなぐ 双子の島の記憶 *

絳月 まや

イタリア半島の西側で、地中海に浮かぶサルデーニャとコルシカは「双子の島」と呼ばれる。両方とも縦長の島で、南北に並んでいる。その距離は、わずかに十数kmしか離れていない。南のサルデーニャは四国より一回り大きく、北のコルシカはその半分にも満たない。数万年前の氷河期には、海面は今より百メートル以上も低く、二つの島は陸続きだったそうだ。暖かくなって氷が解け出すと、二つの島は別々の運命を生きていくことになる。有史以来、「双子の島」の間には、何度も何度も国境線が引き替えられてきた。今日、サルデーニャはイタリアで、コルシカはフランスである。それでもやっぱり、二つの島は「双子の島」だ。ヴェルメンティーノという白ワインをそれぞれの島で味わった時、私はそう思わずにいらなかった。ヴェルメンティーノというワインは、国境を超えて、かつて二つの島が一つにつながっていたという記憶そのもののなのかもしれない。

*

コルシカ最南端の景勝地、ポニファシオの海は濃い青をしている。その青の鮮やかさに心奪われながらも、私の意識は耳に集中していた。地元の人たちの話す言葉が、イタリア語に聞こえてしかたがないのである。この島の公用語はフランス語とコルシカ語であるにもかかわらず、である。ヴェルメンティーノの名産地パトリモニオでレストランに入った時、謎が解けた。メニューに、「ヴェルメンティーヌ」という文字が躍っていたからだ。コル



【コルシカの「ヴェルメンティーヌ」】

シカの人々は、イタリアでヴェルメンティーノ (vermentino) と呼ばれるワインを、「ヴェルメンティーヌ (vermentinu)」と呼んでいるのである。私の耳に、イタリア語に聞こえてしかたなかったのは、地元の人たちが話すコルシカ語だったのだ。コルシカ語は実際、言語学的に印欧語族イタリック語派の言語で、イタリア語と深いつながりがある。イタリア語でワインを意味する vino はコルシカ語では vinu、赤ワイン vino rosso は vinu rossu で、白ワイン vino bianco は vinu biancu だ。あまりにも、イタ

リア語に似ている。イタリア語の語末の o はコルシカ語では u になるという一定の法則も見られる。これでは、コルシカは、フランスというより、イタリアだ。フランスの顔をしたイタリアだ。運ばれてきた「ヴェルメンティーヌ」は海の香りがした。しっとりとした潮風が漂ってくるようだ。



【サルデーニャの海】

レストランのメニューに視線を戻す。本日一品に、「からすみのスパゲッティ」を見つけた。からすみのスパゲッティは、ヴェルメンティーノと相性抜群のサルデーニャ郷土料理として、あまりにも有名である。ここはやはり、イタリアなのかもしれない。運ばれてきたスパゲッティを口にする。ああ……麺が柔らかすぎる。本場イタリアにおけるアル・デンテという理想から、かけ離れすぎている。フランスは、世界に名だたる美食の国である。そのフランスがなぜ、パスタの茹で加減についてはこんなにも愛がないのか。ここはやはり、フランスなのだ。フランスのパスタにがっかりしたことは一度や二度ではない。フィレンツェで知り合った、フランス人の友人宅での経験は特に忘れられない。私が着くと、食前酒を準備しながら、「お腹減った？ パスタ茹でといたよ」と、彼女は微笑んだ。私は、怒りに近い失望を覚えた。パスタは、食べる時に茹でるものである。

コルシカが、フランスでありながらイタリアに酷似しているのは、その歴史を紐解けば頷ける。サルデーニャにしても、コルシカにしても、この「双子の島」は、先史時代には独自の文明を持っていた。それが、イタリアの礎である古代ローマ帝国の属州に組み入れられた時、「イタリア化」が始ま

る。太古の昔からずっと同じような環境で育った双子が、異なる環境で生きていくことになるのは中世以降だ。コルシカは、11 世紀にピサ共和国、14 世紀にジェノバ共和国に征服される。独立運動に困惑して、ジェノバがコルシカをフランスに売却したのは1768年のことだ。つまり、コルシカは、長

くイタリアの都市国家の支配下に入り、フランス領になったのは悠久の歴史の中では比較的最近のことなのである。一方、中世以降のサルデーニャは 13 世紀末から四百年もの間、スペイン系国家の支配下に入った。それが再びイタリアの顔を帯び始めるのは 18 世紀、現在のフランス南東部とイタリア北西部にかけて勢力を築いていたサヴォイア公国に併合されてからだ。サルデーニャを手に入れたサヴォイア公国は「サルデーニャ王国」と名乗るようになり、19 世紀後半のイタリア統一運動で大きな役割を果たしていく。この結果、サルデーニャがブーツの形をした現在のイタリアの一員になったのはわずかに百六十年前のことである。だから、サルデーニャはイタリアでありながらも、異国の情緒にあふれる島なのである。

そんなサルデーニャの海は、透き通ったパステルカラーの水色をしている。水に色はないはずなのに、色鉛筆の中に水色という名前の色が存在することの意味が始めてわかった気がした。太古からそこにあって、一点の曇りもない水。なんと神秘的な光景だろう。地元の知人たちと一緒に木陰を陣取ると、私はスーパーで買ってきたばかりのペコリーノ(羊乳のチーズ)とパーネ・カラザウを取り出した。パーネ・カラザウはサルデーニャ特有

のパンだ。半円状で薄く、乾燥させた状態で店頭
に並んでいる。羊飼いが長旅に出る際に保存食
として携帯したのが起源だそうだ。このパーネ・カ
ラザウをパリッと割って、ペコリーノを乗せて食べ
る。目の前には、太陽の光を浴びて水色に輝く海。
そこはもう天国だ。その舌の上に、冷やしておい
たヴェルメンティーノを一口流し込む。ほのかな
潮風が香り立ってきた。

ヴェルメンティーノは今、イタリアで爆発的な人
気を誇っている。人気の秘密は、何といても、こ
の海のリゾート感にある。それは、地中海沿岸で
造られる「海のワイン」なのである。中でも、サル
デーニャの名産である「ヴェルメンティーノ・ディ・
ガッルーラ」は、イタリアのワイン法において最高
ランクの DOCG に格付けされている。サルデー
ニャのヴェルメンティーノには、最高級のリゾート感
が演出されているのだ。同じ葡萄がフランスでは
コルシカで栽培されている訳であるが、フランス
の「ヴェルメンティーヌ」はコルシカのローカルワ
インである。決して、悪い意味ではない。ボルドー、
ブルゴーニュといった高級ワインが世界ブランド
として君臨するフランスでは、ある意味、それ以外
はローカルワインである。そして、そのローカルワ
インに、地元の人たちは大きな誇りを持っている。

ヴェルメンティーノという品種の起源は明らか
になっていない。それでも確かに、コルシカで味
わった「ヴェルメンティーヌ」のしっとりとした潮風
の香りと、サルデーニャのヴェルメンティーノのほ
のかな潮風の香りは、同じ海の匂いがした。どこ
から来たのか、その葡萄は風に乗って海を渡り、
「双子の島」に流れ着き、同じDNAを持ちながら
異なる環境で生きてきた二つの島で、イタリアの
顔をしたヴェルメンティーノとフランスの顔をした
「ヴェルメンティーヌ」という違った個性のワインに
なったのだ。そこに共通する潮風の香りは、「双子
の島」のDNAに刻み込まれた海の記憶なのかも
もしれない。人間で言えば胎内記憶と呼ばれるもの
のような、地中海という羊水を一つにつながつて
浮遊していた頃の記憶だ。それは、年月の経過と
共に、意識の表層からは消えてしまったとしても、
深層からは決して消えることのない、かけがえの
ない記憶なのである。

*



【コルシカの海を望む葡萄畑】

記憶とは不思議なものだ。折に触れ、何の脈絡
もなく、なぜ今そんなことを思い出すのかわから
ないようなことが、突然心に浮かんでくることがあ
る。——熱を出して学校を休んだ日、障子越しに
差し込んでくる白い光が眩しくて、母の作ってくれ
たお粥が妙においしくて、このまいつまでも熱
が下がらなければいいのにと考えた——たとえ
ば、ヴェルメンティーノと「ヴェルメンティーヌ」の潮
風の香りに思いを馳せているうちに、なぜだか、
そのような幼少期の極めて個人的なたわいもな
い瞬間が、私の脳裏に甦ってきた。そのたわいも
ない瞬間が、自分にとってはとても大切なもので
あるがために、普段は忘れていても、何らかのき
っかけで、意識の深層から浮かび上がってくるの
だろう。私たちは、そんな一瞬一瞬の記憶の積み
重ねでできている。つまり、記憶は過去のもので
はなく、今の私たち自身なのである。もしかすると、
記憶は、一人では生きていくことのできない私た
ちが、誰かとつながっているためのツールなのか
もしれない。「双子の島」のワインに漂う海の匂い
に、私は亡き母を想い、そんなことを考えてみる
のだった。

(ライター、イタリアソムリエ協会/
AIS 認定ソムリエ)

ペリフェリアの憂鬱 ③

* ヴェーレのバイタリティあふれる人生 *

二宮 大輔

『語るに足る、ささやかな人生』という本がある。作者は駒沢敏器。音楽カルチャー雑誌「SWITCH」や「STUDIO VOICE」などに携わり、現代アメリカへの造詣の深さから、かの国をテーマにしたエッセイ、小説、訳書などを発表するが、2012年に51歳の若さで亡くなった。本作はアメリカの大都市ではなく、スモールタウンを駒澤自身が巡り、そこで見聞きした人々の暮らしを綴っていく、ロードムービーにも似た紀行文だ。2005年に日本放送出版協会から刊行され、2007年に小学館文庫から再版された。それが今年、おしゃれな装丁で新進気鋭のひとり出版社の風鯨社から再び刊行されたのだ。

アメリカの郊外を映画で論じた『サバービアの憂鬱』にインスパイアされてこの文章を書き始めた私からすると、『語るに足る、ささやかな人生』には、テーマの類似性を感じずにはいられない。風鯨社版を購入して読んでみたところ、とても興味深いエピソードを見つけた。第4章「温もりの夜の中へ」のなかで、駒沢はダーリントンという町に立ち寄る。彼によると、スモールタウンの古いカフェに行くと、人の家に直接来たような温かいホスピタリティを感じる。そして温かくもてなしてくれるカフェは、決まって味も昔のままでおいしいという法則が成り立つというのだ。ところが、一度だけその法則が通用しなかったことがある。それがダーリントンだ。町の拠点のカフェに入って料理を注文してみると、まったくおいしくない。それはつまり、その町が昔から大切にしてきた何かが消えていることを意味する。さらに町の住人たちに話しかけてみたところ、冷たい態度をとられた。町がこうなった理由がどこかにあるはずだと車で周辺を走ってみると、通常のスモールタウンには似つかわしくない高級住宅街が出現した。さらにその奥には大学のキャンパスがあるではないか。つまり、

寂れかかった町の経済を立て直そうとキャンパスを誘致したのが原因だ。地元民は新しく町に流入してきた人々とうまく交流が図れず、町の空気は変わり、ついには元に戻れなくなってしまったのだと駒沢は分析する。



【語るに足るささやかな人生】

この話に興味を持ったのは、私が訪問したスカンピアの巨大集合住宅ヴェーレの真横にも大学のキャンパスが誘致されていたからだ。ヴェーレは1970年代にナポリ北西部に建てられ、何棟も連なる三角形の板状の見た目から、帆を意味する「ヴェーレ」と呼ばれるようになった。1980年代には治安が悪化し、ナポリの犯罪組織カモッラの巢窟と恐れられ、2000年代まで麻薬流通の縄張りを巡って抗争が繰り返された。この現実を世に広めたのがロベルト・サヴィアーノのルポ『ゴモラ』であり、それに続く同名の映画、TVドラマである。抗争が起きて犠牲者を出したのは事実であり、『ゴモラ』がそれを広く世に知らせたことは功績と言える。だが、同時に消し去ることのできない負のイメージをスカンピアに刻み込んでしまった。そこには、犯罪組織だけではなく、当然のこととして地元住民たちの暮らしもある。1990年代から、彼らはヴェーレを取り壊して町を再生させるために市に働きかけて

きた。ナポリ市の財政難やコロナ禍などで、ヴェーレの取り壊し工事はたびたびストップしたものの、ついに今年、管理棟として残される1棟を除くすべてが取り壊されることとなった。並行して、ヴェーレの元住人たちにあてがわれるための新住居の建設が進められている。ただ、強制退去させられたヴェーレの住人たち全員に新住居が保証されているわけではないところは問題だ。また、カモツラは、スカンピア再生プロジェクトが具体的に進むのに合わせて、より郊外の地区に拠点を移しはじめた。つまり、犯罪組織や麻薬流通の問題は根本的には解決されていないことにも留意しておきたい。



【ヴェーレ】

さて、この再生プロジェクトの一環として、2022年、800年の歴史を持つフェデリコ2世ナポリ大学の新キャンパスが完成する。竣工式典に際して大学研究大臣マリア・クリスティーナ・メッサは「今回のプロジェクトは、ナポリ市だけにとどまらず、大学という教育機関が自らのテリトリー、自らの国にどれだけのことができるかを示した重要な印です」と述べている。ここで先ほどの話を思い出していただきたい。アメリカのスモールタウンのダーリントンでは大学のキャンパスを誘致したことで、外部の人間が町に流入して、スモールタウンの温かみが失われてしまった。ではフェデリコ2世ナポリ大学は、スカンピアに何をもたらしたのだろう。

実際に現地に行ってみると、昔ながらの街並みに突如としてスタイリッシュな真新しい建物が現れる。噂のフェデリコ2世ナポリ大学新キャンパスだ。手前に何軒かバールがあり、どこも学生と思われる若者たちで賑わっている。キャンパスのある通りがメインの通りに合流する角には、伝説のシンガーソングライターのファブリツィオ・デ・アンドレの巨大グラフィティが描かれている。こちらは新キャン

パス竣工の同時期に、ナポリのグラフィックライターのヨーリットが描いたものだ。ヨーリットと言えば、ナポリの下町フォルチェッラに描かれた聖ジェンナーロのグラフィティで有名だ。彼の描くグラフィティにはどれも、アフリカの特定の部族を表す傷が顔に入っており、「人間は皆ひとつの部族」というメッセージが込められている。確かに新キャンパスや有名ライターのグラフィティはこれまでのスカンピアの雰囲気とは似つかわしくないが、ナポリ北部に住む学生たちからは、図書館や自習室が完備されたキャンパスが身近にできたため、おおむね好意的に受け入れられている。



【左：ファブリツィオ・デ・アンドレグラフィティ／右：大学キャンパス】

続いてメインの通りを道なりに歩いて解体作業中のヴェーレを見学しに行く。背の高い仮囲いから巨大なヴェーレが顔をのぞかせている。私が訪れたのは2025年の5月だったので、まだ残された2棟が巨大廃墟と化して静かにそびえていた。上階の壁には巨大な文字で「私たちが問題ではない」(NON SIAMO NOI IL PROBLEMA)と書かれている。住民たちの怒りの声だろうか。不幸にも悪名を轟かせ今は解体を待つばかりのヴェーレは、得も言われぬ異様な空気に満ちあふれていた。

おなががすいたので大学キャンパスとヴェーレのちょうど間にある路面のパン屋に行く。パン屋といっても、イタリアによくある、太めのバゲットや平べったい丸型パンなど、食卓に上るさまざまな形状のパンや、乾麺のパスタ、ビスケットなどが売られている小麦製品店で、いかにも地元民御用達といった雰囲気だ。路面にせり出したショーケースで

パニーノを選び、パン屋の壁に並べられている背の高いイスの一つに座って昼食をとった。出来立てのパニーノに舌鼓を打つ。対応してくれたのは、エプロン掛けで白髪混じりの屈強な男性だったのだが、私が外国人であることを意に介さぬ早口のナポリ弁で、「パニーノ一つで足りるのか。もっと食べろ」と、商売人根性というよりは、年少者を気遣う口調で声をかけてくれた。年のころは 60 歳過ぎだろうか。ヴェーレができて、カモッラが抗争をして、今は再開発の工事が行われているスカンピアの変化を、この店からずっと眺めてきたのかもしれない。そう考えると、この初老の男性のたたずまいに深みがある気がしてきた。そして、彼の対応からは、ここにもアメリカのスマールタウンと同じような温かいホスピタリティがあると感じた。



【上階の壁に NON SIAMO NOI IL PROBLEMA の文字が】

前提として、アメリカのスマールタウンのダーリントンとナポリのスカンピアでは、比較に適していない大きな違いがある。まず町の性質が違う。『語るに足る、ささやかな人生』の作者の駒澤が回ったアメリカのスマールタウンは、1950 年代に自動車の普及とともに発展した町々の一つであり、現在は大都市の「外」に取り残された哀愁を漂わせている。これは広大な国土を持つアメリカ特有のものであって、イタリアにはあまり存在しない。むしろイタリアの小さい町々といえば、BS の人気テレビ番組「小さな村の物語 イタリア」で見られるような、何世紀も山間で酪農が営まれる牧歌的な村のことだ。いっぽうスカンピアは大都市ナポリの郊外の一地区であり、独立した一つの町というわけではない。市内からも公共交通機関で容易にアクセスできる

ゆえに、巨大集合住宅が建てられ、続いて治安悪化を招いた。

ただ、そんなダーリントンとスカンピアだが、そこに住む人たちの温かみがあったという点は共通している。大学キャンパス誘致で町の再生を図ったところも似ているが、ここが大きな注目ポイントだ。ダーリントンでは外部の人間が入り込んだことで、地元民の態度は硬化し、スマールタウンの温かみを失ってしまった。それに対し、スカンピアは再生プロジェクトという大きな変化を受け入れて、さまざまな問題を抱えたまま前進している。当然、外部の人間も増えたが、地元民は硬化することなく、ある種、変化をものともしないバイタリティの高さを発揮した。そしてこのバイタリティは、まさしく犯罪組織に対抗するために地元民が身に着けた生存本能だったのではないかと思う。今回アメリカのスマールタウンを知ること、昨年訪問したスカンピアをより立体的に感じる事ができた。

(翻訳家・当館元受講生)

～京都国立近代美術館展覧会開催記念～ フォンタネージ・イタリアの光・心の風景

講 師：小野 真司

(京都国立近代美術館研究員)

日 時：2026 年 7 月 25 日(土)

10:30～12:30

場 所：日本イタリア会館 京都本校

参加費：個人維持会員 1,000 円

受講生・一般 2,000 円

京都土曜日イタリア語クラスの受講生は無料

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館

〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4

TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357

E-mail: centro@italiakaikan.jp

URL: <http://italiakaikan.jp/>